

# Arthuriana Japonica: Newsletter No. 28

October 2015

## 国際アーサー王学会日本支部会報

Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

### 目次

I. 2014 年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
シンポジウム「書物の過去と未来」発表要旨	3
研究発表要旨	5
ブカレスト大会発表報告	6
II. 新役員について	6
III. ウィリアム・スネルさんのこと	7
IV. 内規：交通費について	7
V. 電子化について	7
VI. 会計年度および入会金について	8
VII. 会計からのお願ひ	8
VIII. 2015 年度大会について	8
IX. 会員名簿に関するお願ひ	8
X. 研究発表・シンポジウム企画募集	8
XI. 2017 年度国際学会	8
XII. 文献情報	8
英文学	8
独文学	9
仏文学	10
中世ラテン学・伊文学・西文学・その他	12

### I. 2014 年度年次大会報告

日本支部の 2014 年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2014 年 12 月 13 日 (土) 午後 13 時より

[場所] 龍谷大学大宮学舎南翼 203 教室

[大会費] 1,000 円 (学生無料)

[懇親会費] 6,000 円 (学生 3,000 円)

### 年次大会プログラム

\*開会 (13:00)

\*開会の辞 支部長 細川哲士 (立教大学名誉教授)

\*第 1 部：シンポジウム「書物の過去と未来」  
(13:00~)

司会：嶋崎陽一 (龍谷大学)

「ドイツ語圏における最新の古写本・古刊本研究・テキスト校訂の現状について——初期中高ドイツ語版『創世記』の三写本を例に」 浜野明大 (日本大学)

「江戸時代の暦流通をめぐって」 梅田千尋 (京都女子大学)

「デジタル技術を応用した初期印刷本の印刷工程の解明」 安形麻理 (慶應義塾大学)

「印刷本と電子校訂」 小栗栖等 (和歌山大学)

第 2 部：研究発表 (15:30~)

司会：林邦彦 (尚美学園大学非常勤講師)

「ミネ歌人ハインリヒ・フォン・モールンゲンにおける minne と liebe——MF131, 25 を中心に」 伊藤亮平 (松山大学非常勤講師)

「『私は一文字も知らない』——ヴォルフラムの『パルツィヴァール』における原典言及の問題」 青木三陽 (京都大学非常勤講師)

第 3 部：ブカレスト大会発表報告 (16:45~)

司会：篠田勝英 (白百合女子大学)

「トリスタンの「遺言」、恋人たちの cuer」

佐佐木茂美 (明星大学名誉教授)

第 4 部：支部総会 (17:30~)

\*懇親会 (18:30 より)

場所：胡麻のたね (京都市下京区)

2014 年度大会も、会員・非会員の皆さまに多数ご参加・ご協力により、無事に開催することができました。物心両面に渡るあたたかい応援を下さったみなさまには、心より御礼申し上げます。また受付業務も龍谷大学の学生さんにご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。懇親会も、盛会のうちに終了することができました。ご参加・ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。(文責：嶋崎陽一)

## 総会議事録

### \* 報告事項

- (1) 2014 年度の活動について
- (2) 書誌担当からのお願いと報告

Bulletin とニューズレターに掲載される書誌の編集方針の違いについてあらためて説明があった。前者はアーサー王伝説もしくは中世文学に関連する会員業績に限り、後者は会員のその他業績および広くアーサー王伝説関連の出版物を掲載する。

また掲載にあたっては、できるかぎり執筆者本人から書誌担当者に献本や抜き刷り送付をお願いしたい旨が強調された。

- (3) 大会報告

松原秀一氏（慶應義塾大学名誉教授）が14年6月に逝去されたため、本学会を退会となったことが報告された。

なお、司会者の不手際により、加藤誉子氏（英 De Montfort 大学）の退会報告が成されなかったことをここに陳謝いたします。イギリス支部との重複加入のための退会です。

- (4) 支部長選挙の結果報告（選挙管理委員より）

14年秋に行われた支部長選挙の結果が選挙管理委員である西川正二氏（慶應義塾大学）より、不破有理氏（慶應義塾大学）の当選が報告された。

- (5) 新役員の紹介

次期支部長不破有理氏より当選の挨拶と、2015年～2017年度の幹事会新役員の紹介があった。

### \* 審議事項

- (1) 年次大会に関する内規について

今大会において非会員をシンポジウムに招聘したが、これまでこうした場合における謝金・交通費などの支払いに関する規定がなかった。この事項に限定して「国際アーサー王学会日本支部年次大会運営に関する暫定的な内規」を提案し、承認された。

- (2) 2014 年度決算報告

会計担当幹事の渡邊徳明氏欠席のため、副会長の不破有理氏より2014年度の会計収支決算報告が報告された。西川正二氏による監査報告があり、会員の承認を受けた。

## 収入

項目	収入金額
大会費	29,000
展示料	10,000
懇親会会費	120,000
会費・入会金	241,000
寄付金	10,000
利子	207
小計	410,207
2013 年度からの繰越金	720,295
計	1,130,502

## 支出

項目	支出金額
懇親会費用	116,000
大会アルバイト料	10,000
本部への学会誌代支払い	200,118
送金手数料	2,932
事務・雑費・郵便費	87,345
ホームページ関連費用	6,631
招待講師交通費	0
会費振り込み手数料	1,450
小計	424,476
2015 年度への繰越金	706,026
計	1,130,502

注) 2014 年度決算において 775,026 円が学会の普通口座の残高であるが、このうち 69,000 円は前回会計決算以降から今回決算までの間に口座振り込みで会費として納められた金額の合計であり、15 年度収入の一部としてストックされている「前受け金」である。従って、実質的な 15 年度への繰り越し金は口座残高からこの前受け金 69,000 円を差し引いた、706,026 円である。逆に、706,026 円(2015 年度への繰越金)+69,000 円(前受け金)=775,026 円(締め時における口座残高)

- (3) 2015 年度予算案提出

続いて 2015 年度予算案が提出され、会員の承認を受けた。

## 収入

項目	収入金額
懇親会費	102,000
大会費	20,000
会費・入会金	210,000
展示料	10,000
小計	342,000
2014年度からの繰越金	706,026
計	1,048,026

## 支出

項目	支出金額
懇親会費	102,000
大会経費・アルバイト料	10,800
本部への学会誌代支払い	200,000
海外送金手数料	2,500
事務・雑費・郵便費	40,000
ホームページ関連費用	6,600
招待講師交通費	20,000
小計	381,900
2016年度への繰越金	666,126
計	1,048,026

### (4) 新入会者承認について

以下の1名より入会の希望があり、これを承認した。

青木三陽氏（独文学：京都大学非常勤講師）

（文責・嶋崎陽一）

## シンポジウム「書物の過去と未来」発表要旨

司会：嶋崎陽一

①「ドイツ語圏における最新の古写本・古刊本研究・テキスト校訂の現状について——初期中高ドイツ語版『創世記』の三写本を例に」

浜野明大

高ドイツ語版『創世記』（*Die frühmittelhochdeutsche Genesis*）は旧約聖書モーゼの第一巻に題材を取り、世界創造からエジプトのヨゼフまでの記述である。大部分は聖書の内容に従って書かれているが、叙

述には当然のことながら大幅な変更や独自の表現が見られ、初期中高ドイツ語時代の研究にとって重要な文献である。

テキストは次の三つの写本、ウィーン写本（Wiener Handschrift Cod. Vind. 2721）、フォーラウ写本（Vorau Handschrift Cod. 276）、ミルシュテット写本（Klagenfurter-Millstätter Handschrift）という三つの写本で伝承されている。

三つの写本には、それぞれ編纂者の独自の観点で作られた版やファクシミリが存在したが、写本間のテキスト比較が容易にできるような版は存在しなかった。そこで、ミュンヘン大学に2008年提出し、2009年にマイクロフィッシュで刊行した2巻構成の博士論文 *Die frühmittelhochdeutsche Genesis. Parallelausgabe nach der Wiener und der Millstätter Handschrift sowie für die Josephgeschichte nach der Vorauer Handschrift. Mit exemplarischen Untersuchungen zur Bearbeitungstechnik.* (V.463-1050) において、ミルシュテット写本の改作技法のテキスト分析をするとともに、第2巻で三写本の「平行版」（Parallelausgabe）を作成した。今回の版は Classical Text Editor (CTE) という高性能な編集用ソフトを使って作業を進め、批判考証資料 (Kritischer Apparat) を大幅に改善し、視点を変えて抜本的に平行版を作り直した約6000詩行という広範囲に及ぶ作品の全テキストを初めて全三写本に応じて作成された平行テキスト版であり（おおよそ全15000詩行）、ミルシュテット写本の挿絵を写本のカラーキャンによって、本来の文脈において再現することに成功している。さらに、三写本全ての細部検証もでき、全てのテキストをウィーン、フォーラウ、クラゲンフルトの初期中原典を基に新たに再精査することが可能となった。この結果は、三写本全てに対するテキスト批判的原典考証資料に注意深く文章化されており、原典刊行版として極めて完成度の高いものとなっている。

本発表では、初期中高ドイツ語版『創世記』の三写本平行テキスト版作成工程において学んだ様々な最新技術を紹介し、「書物の過去と未来」を考えた。

②「江戸時代の暦流通をめぐって」 梅田千尋

本報告では、年間推計400万部という近世日本

最大規模の刊行物であった「仮名暦」に着目し、その作成・発行・流通システムについて紹介した。前近代東アジア世界において、暦は、時間・空間を支配する王権の象徴であった。それは単なる比喩ではなく、太陰太陽暦特有の複雑な暦日計算（月の大小・置閏）が、高度な天文知識と権威による決定を必要とするが故の伝統であった。日本の場合、6世紀から9世紀迄の古代律令国家期には同時代の中国王朝から暦が授けられ、陰陽寮が国内の年暦作成・頒暦を行った。しかし、遣唐使の廃止に伴い、宣明暦（859年伝来）以降800年近く改暦は行われなくなった。日本国内の統一権力による次なる改暦は、江戸時代まで降る。江戸幕府は天文方を設置して改暦を実行し、清からの授暦ではなく独自の暦法による貞享暦（1684）を制定した。なお、伝統的権威を保持した朝廷もこれに関わった。

一方、律令期の暦は官衙・寺院など狭い範囲での流通にとどまっていた。実際に暦が印刷物として普及したのは14世紀以降であり、16世紀には各地に「仮名暦」を刊行する暦師が現れた。暦師の業態は、京都や江戸の暦を販売する書肆や、伊勢や南都（奈良）で陰陽師・伊勢神宮御師ら民間宗教者が旦家に配布する土産暦（賦暦）を作成する暦師など地域によって異なり、同一の板元による暦が売暦・土産暦の両形態をとる事例も存在した。各地での暦作成が可能であったのは、余りに長く用いられた「宣明暦法」を地方の暦師が習得し、独自に年暦を算出して・暦を発行したためである。これは同時に、地域間で暦日の誤差が発生する原因ともなった。

貞享改暦は、こうした地域間の不統一を解消する事業でもあった。以降毎年暦の原本（年暦）が幕府天文方と朝廷陰陽頭によって作成され暦日が統一されたが、各地の暦師の販売網を通じた全国流通という中世由来の形態は踏襲された。

### ③「デジタル技術を応用した初期印刷本の印刷工程の解明」 安形麻理

本発表では、初期印刷本研究にデジタル技術を応用した最新の動向を紹介した。

Blaise Agüera y Arcas と Paul Needham は、グーテンベルクの最初の活字で印刷された『トルコ教書』の画像中の小文字 i のクラスタリング分析を

行った。活字は金属製の父型と母型を用いて鋳造されたという定説が正しいなら、同じ母型から作った活字は同じクラスターにまとまるはずである。しかし、分析の結果非常に多くのクラスターに分かれたことから定説に疑問を呈し、大きな注目を集めた。ただし、印刷の実務家からの反論はあるものの、画像を識別するための適切な手法が確立されていないことから、効果的な検証や反証は十分には行われていない。

次に、発表者によるデジタル画像の重ね合わせによる校合の手法について報告した。現存諸本に見られる印刷中の修正箇所は、最初期の印刷所の作業工程についての貴重な手がかりとなる。デジタル技術を援用することにより、綴りはもちろん、字体や語間の変更等も発見し、結果を客観的に保存することが可能となった。この手法により、グーテンベルク聖書の体系的な校合が可能となり、最初の印刷所でも修正作業が行われていたこと、羊皮紙ページが紙ページよりも後から印刷されていたことなどが明らかになった。

最後に、グーテンベルク聖書を対象とした活字画像の自動抽出および自動認識を目的に発表者らが行っている研究について述べた。グーテンベルク聖書などのゴシック体を使った初期刊本は、一般的なOCRソフトでは活字境界を識別できないため、大規模かつ機械的なテキストデータ化は進んでいない。現在、写本や初期刊本の活字画像の自動認識については様々な手法が提案され、発展の途上にある。発表者らの提案手法では、活字画像を自動識別し人手で修正する半自動化を実現することによって活字境界識別やトランスクリプションにかかる労力や時間を大幅に軽減できた。また、活字画像を対象に、オープンソースの統計パッケージ R 3.1.1 上でワード法によって階層的クラスタリングを行なった結果、活字鋳造方法についての議論に寄与する可能性を示すことができた。

### ④「印刷本と電子校訂」 小栗栖等

2013年にWEB上に公開した *L'Édition électronique du Roland d'Oxford* の校訂作業を、コンピュータ利用の面から紹介した。この仕事を行う際に、真っ先に問題になったのは、机の上を埋め尽くす膨大な諸資料をいかに効率的にさばるかであった。実際、

『ロランの歌』を今日に伝える最古の写本、オックスフォード本は、19世紀に再発見されて以来、幾多の研究者によって校訂されてきたため、この写本に関する過去の研究資料は膨大なものにのぼる。さらに、『ロランの歌』には他の写本も存在し、それらには三種の校訂本が存在する。そのため、作業の際、常時手元に置く必要のある校訂本は、40冊以上にも及んだのである。むろん、校訂を行うには、さらに、写本を常時確認できなければならないし、その時々に応じた参考文献も必要となる。さらに、頻繁に参照しなければならない、古仏語辞書や語源辞書は5種類以上に及び、そのほとんどは、10巻を超える大型辞書である。もはや、机の上だけではなく、机を取り囲む書棚さえも埋め尽くすボリュームである。それらを、コンピュータの画面上で、すべて参照できるようにするべく、筆者はいくつかの自作ソフトを考案した。大型辞書をまるで一冊の辞書のように一括して検索し、さらに複数の辞書を簡単に切り替えることができるのが、DurendalとAlmaceである。作品の行番号を入力すれば、複数の校訂本の該当ページを一括して見つけ出し、次々に画面を切り替えて表示できるのがEscarboucleである。写本の各行の位置情報を保持し、行番号を入力すれば、該当画像を表示したうえ、校訂テキストを上重ねて描画してくれるのがOliphanである。膨大な数の電子テキストの索引を一括して検索し、必要に応じて、索引の参照番号から、該当詩行を見つけてくれるのがHalteclereである。pdf化した参考文献類を効率的に参照できるのがVeillantifである。こうした電子ツール類を利用することにより、諸資料の参照が格段に容易なものとなった。それにより、従来なら手間がかかりすぎてほとんど実現不可能だったようなこと、たとえば、一詩行ごとに、逐一、すべての刊行本を見比べるといったことも行えるようになったのである。なお、上記のソフトの多くは、筆者のサイトで公開されている。<http://www.conet.ne.jp/~ogurusu/Fr/ProjetRollant.html>

## 研究発表要旨

①「ミンネ歌人ハインリヒ・フォン・モールンゲンにおける minne と liebe——MF131, 25 を中心に」  
伊藤亮平

本発表では、13世紀初頭ドイツのミンネ歌人ハ

インリヒ・フォン・モールンゲンの minne と liebe の用例に着目し、モールンゲンのミンネ観を考察した。

宮廷叙事詩において言及される男女間の「愛」(minne)が最終的に成就されるのに対し、ミンネザングで描かれる minne は原則的に成就しない。このようなミンネは「高きミンネ」と呼ばれる。成就しない理由として、女性が既婚者であること、あるいは報われない女性奉仕を通じて、男性は己の精神向上を図ることを最終的な目的としていること、等が従来挙げられてきた。しかしいずれの見解にせよ、報われないにも拘らず、女性の愛を求めて女性に奉仕を続けるという「高きミンネ」は本質的に矛盾を孕んでいることに変わりはない。「高きミンネ」の完成に大きく寄与したモールンゲンであるが、彼のリートにも「高きミンネ」に対する批判が萌芽的に表れている。「ミンネとは何か」という問いかけは、モールンゲン以前には、既にハウゼンのリート MF 52, 37 にも見られるが、モールンゲンはさらに論を進め、minne の類概念である liebe に考察の目を向けている点を本発表では強調した。モールンゲンは minne には「喜びを増やす」(MF 145, 1) 力があるとしながらも、同時に歌人の「喜びを殺す」(MF 134, 6) という両義的な作用を備えているとする。一方、中高ドイツ語の liebe は「喜び」の他に「愛」を意味し、minne とは意味場を共有しつつも微妙なズレがある。モールンゲンはこの曖昧さを MF 131, 25 で取り上げ、喜びをもたらすのが liebe であるなら minne とは何かと問うことによって、minne に対する批判的態度を垣間見せる。モールンゲンにとって liebe は己の内面から湧き上がる自発的感情であり、MF137, 27 では、女性の美德は歌人に内在する「心からの愛」(herzeliebe)によって見出すことができると説く。モールンゲンは「高きミンネ」について、自身の見解を積極的に打ち出していないものの、liebe が持つ肯定的側面を強調することで従来の苦行者的なミンネ観に揺さぶりをかけると同時に、個人の自然な情動をより重視しようとする姿勢を見せるのである。

②「『私は一文字も知らない』——ヴォルフラムの『パルツィヴァール』における原典言及の問題」  
青木三陽

今回の発表では、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『パルツイヴァール』における物語の典拠についての言及箇所を個別に観察し、さらに当時の俗人のフィクション意識との関係についても言及した。

一種の歴史文学であることを主張する宮廷叙事詩にとって、物語の内容の真実性を保証するのは文字で書かれたテキストすなわち「書物」への依拠という手段であった。ところがヴォルフラムは作品の冒頭部において自らの文盲を告白し、聖職者の立場に近い他の学者詩人たちは立場を異にする俗人詩人としての自己主張を行う。実際には、この主張に反して文筆文化に依ったとしか思えない様々な情報が作品の内容に巧妙に組み込まれており、その典拠についても徐々に実態が明かされていくことになる。だが、それらは従来の宮廷叙事詩人のそれのように一元的ではない。複次元的とも称すべきものとなっている。これが典拠の問題に関するヴォルフラムの最大の特徴である。ヴォルフラムにとっては、この複数の情報源の存在は場当りのものではない。物語の終末付近でも暗示されているように、自らの作品がそのようなものの総体として見られることを要求しているのである。例えば同時代的共有知、占星学、歴史記述といった複層的な素材が互いに相互補完しつつ、最終的に同時代のどの宮廷文学よりも完成度、完全度（クレチアン・ド・トロワの聖杯物語は未完である）を誇る作品を構成する材料として統合されるよう巧みに計画されている。知の次元を異にする複数の情報の統合が、結果としてまったく別種の豊かさと可能性を秘めた物語世界を創造する。一貫して俗人の代表として語る詩人は、この手段によって、新興の俗語文学に独自の価値を付与することに成功していると言えるだろう。

## ブカレスト大会発表報告

「トリスタンの「遺言」、恋人たちの cuer」

佐佐木茂美

『散文トリスタン』のエピローグは恋人たちの死の場面にとどまらない。①主人公の「臨終」の一ヶ月余、その最後の遺言、②決定的な末期の場面、③死者の意志の執行、「円卓の騎士団」を前に、その「最後」の報告に継ぐ④アルチュールとその臣下の愁嘆の場でもある。⑤恋人たちの死後、墓

所の建立等を含む二つのヴァージョンが共に挿入している連鎖をとりあげた。

残存の断片から推測される『韻文』諸本と異なり、—我が子生誕にあつての母の命名に留まらない—「わたしはトリスタン (Tristanz)、モオルトを殺めし者」(MsC, §240-243) と名乗るトリスタンと同一人物の死である。その直前、メルランもアイルランドの脅威からの救世主の生誕と同定する。「悲しみの子」=「英雄」の自己撞着の物語生成、1170年代の「トリスタンもの」生成の時代に呼応する、古仏語 *trist* との関連（それ以前は *dolent*, *pensif* であった）をも考究した。モオルトとの決闘に遡る三年、ゴールのファラオン王宮廷での敵対する者の遭遇、予言と回帰による絶えざる照合検証されるのは特にエピローグであり、注意深い「読み」が必須となる。

上記①②③④⑤を順次、考究した発表である（類はないはずである）。①「遺言」*nuncupatif*（口頭、複数の証人、執行者）マルク、イズー、サーグルモール（執行人）が死者の希望で選ばれ、③「円卓」に「モオルトを殺めた剣」を運ぶサーグルモールの首に下がる「刃こぼれの剣」の言及・描写は詳細を極める。「V.I」のみの伝えるシャルルマーニュを介して大陸に伝わる「トリスタンの剣」がオジエの手に渡たるという手順、十一世紀ラテン語記述と真逆、叙事的伝承とも異なる—研究は猶なおざりである—、*Ame/arme*（魂/剣）が交換されるテキストの「読み」レヴェルと共に、「聖杯群」とは異なる鍛冶を知らぬ、固有名をもたぬこの物語の方向の意味するところを問うた。

## II. 新役員について

上記の2014年度年次大会報告にあるとおり、支部総会において任命された不破新支部長のもと、新幹事会（2015年～2017年度）が発足しました。新役員は次の通りです。

- ・ 会長（日本支部支部長） 不破有理（英文学；慶應義塾大学）
- ・ 副会長 篠田勝英（仏文学；白百合女子大学）
- ・ 幹事（庶務）・事務局長 徳永聡子（英文学；慶應義塾大学）
- ・ 幹事（会計） 田中一嘉（独文学；成蹊大学）
- ・ 幹事（書誌）・仏文担当書誌 高名康文（仏文学；成城大学）

- ・ 英文担当書誌 新居明子（英文学；名古屋外国語大学）
- ・ 独文担当書誌 渡邊徳明（独文学；日本大学）

Web 委員会委員も以下のように指名されました。

- ・ 委員長 細川哲士（仏文学；立教大学名誉教授）
- ・ 委員 小宮真樹子（英文学；近畿大学）
- ・ 委員 小路邦子（英文学；慶應義塾大学非常勤講師）
- ・ 委員 滝口秀人（仏文学；自由ヶ丘学園高等学校）

### III. ウィリアム・スネルさんのこと

松田 隆美

ウィリアム・スネルさんは2015年3月30日に急性心不全のため55歳で逝去されました。私がスネルさんと初めて出会ったのはもう30年も前で、スネルさんが慶應義塾大学文学部の専任になれる前からのおつきあいでした。初対面の頃にはまだ覚束なかった日本語でしたが、瞬く間にとっても流暢になられ、英語よりもお上手では無いかと（そんなわけはありませんが）錯覚するほどでした。大学の同僚というだけでなく、同じ学会のメンバーとして一緒に仕事をし、アカデミック・ライティングの教科書を一緒に作ったり、私がメンバーとして参加していたヨーロッパ中世の言語観に関する共同研究の例会で発表してもらったり、間違っ2冊買ってしまった研究書をお互いに譲り合ったり、また拙宅に食事に来ていただいたこともありました。

スネルさんの研究上の関心は、黒死病を中心とした中世後期から近代初期にかけての医療文化でした。高宮利行先生と一緒に編集した『中世イギリス文学入門－研究と文献案内』（2008）のために、科学書や医学書にかんするとともにバランスの良い一章を寄稿してくださいました。また、安東伸介先生と岩崎春雄先生がご定年で慶應義塾大学を退職されるのを記念して編まれた論文集（『藝文研究』73（1997））には、慶應義塾図書館所蔵の14世紀後半の写本の遊び紙に残された、粟粒熱を撃退する短いラテン語の祈祷文について、テキストの転写とその文学史的文脈を論じた浩瀚な論文を寄せています。でも、今一番私の脳裏に浮かんでくるのは、大学で学部業務や会議の空き時間に、とくに何を話すでもなく二人でぼんやりと過ごし

たひとときです。中世文学の新刊の研究書やお互いの研究テーマについて話したこともあったと思うのですが、あまり記憶にないのです。覚えているのはたわいもない日常のことで、何を食べたとか、どこで偶然誰に会ったとか、こんなことがあって笑えたとか、そんな事柄です。そうして語り合っていたときの、ゆったりとしたわくわくする感じは鮮明に蘇ってきます。牧歌的な、心温まる時間を過ごせる大切な友人で同僚を失いました。スネルさんとお別れしてからもう半年、日々を暮らしていくなかで、何か面白いことやちょっと笑えるようなことがあると、これをスネルさんに話したら静かにうけてくれるだろうな、英語でどんな風に話せばいいだろうかと今でも考えます。私の心の中にはいつでもスネルさんは生きていますが、言葉にしてお話しできないのが残念です。ご冥福をお祈りします。

### IV. 内規：交通費について

2014年12月13日に開催された幹事会にて、年次大会運営に関する次のような内規の追加の提案がなされ、承認されました。

#### 第一項

年次大会催事における非会員の講師には、実費交通費を二万円を上限として負担する。（ただし、近郊交通費は除く。）懇親会は招待とする。

#### 第二項

第一項は2014年12月13日より施行する。

### V. 電子化について

日本支部では本部の方針にならい、会員の皆様への連絡やニューズレターなどの発行を、電子媒体を活用する方針を検討しております。ただし、郵送での連絡・発送を希望される会員には従来通り、郵送でお送り申し上げます。

この提案につきまして、去る6月に会員の皆様にご意見を募りましたが、反対意見は寄せられませんでした。したがって、同封のハガキのアンケートで、電子化に賛同という回答を寄せられた会員には、今後はできる限りML等を活用した連絡を差し上げる所存です。何とぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

## VI. 会計年度および入会金について

2015年度第1回幹事会において、会計担当より会計年度を総会開催時期に合わせ、12月1日から翌年の11月30日に変更することが提案され、承認されました。今年度は2015年11月30日までの振込分を2015年度収入として処理し、来年度の会計年度は2015年12月1日～2016年11月30日に設定し、再来年度もそれを引き継ぐことになります。また入会金3,000円について、学会のホームページ「入会案内」に記載することが同幹事会で決定されました。

## VII. 会計からのお願い

2016年度分（ならびにそれ以前の未納分の）会費の納入をお願い申し上げます。納入は同封の払込票をご利用ください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

口座番号：00250-6-41865

年会費・入会金：3,000円

会 計：田中一嘉

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集しております。ご寄付いただけます場合、寄付金についても同封の払込票をご利用ください。年会費払込票に「寄付〇口」とお書き添えの上、年会費とともにお振り込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。

## VIII. 2015年度大会について

2015年度大会は次の要領で開催されます。（詳細は同封の大会資料をご覧ください。）

日時：2015年12月12日（土）13:30開会

会場：立教大学池袋キャンパス

11号館A館301号室

懇親会会場：第一食堂2F 藤棚

## IX. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関しては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項（所属・

住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

## X. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら事務局までお寄せください。シンポジウム企画は7月末、研究発表は同年8月末を締切のめどとし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

## XI. 2017年度国際大会

2017年度の国際大会はドイツのWürzburgで開催され、次のテーマが扱われる予定です。

- Voices, Sounds and Rhetoric of Performance
- Post Medieval Arthur Printed and Other Media
- Translation, Adaptation and Movement of Texts
- States of Arthurian Editions : Problems and Perspectives
- Sacred and Secular in Arthurian Romance
- Critical Moments and Arthurian Literature : Past, Present and Future

本部より発表の応募や学会参加方法などの連絡が入りましたら、できるだけ早く会員の皆様に情報をお届けするようにいたします。

## XII. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

### 英文学（書誌担当：新居明子）

<研究（単行本）>

神崎忠昭『ヨーロッパの中世』、慶應義塾大学出版会、2015年。

菊池清明『中世英語英文学 I：その言語・文化の特質』、春風社、2015年。

『チャーサーと中世を眺めて：チャーサー研究会



- 20周年記念論文集』(狩野晃一編)、麻生出版、2014年。
- <研究(雑誌・紀要論文等)>
- 池上忠弘「遍歴の宮廷歌人デーオルの嘆き」、『チョーサーと中世を眺めて：チョーサー研究会20周年記念論文集』(狩野晃一編)、麻生出版、2014年、pp.201-217。
- 岩谷道夫「『ウィードシース』と『ベーオウルフ』におけるジュート：R. W. Chambers の見解を中心に」、『キャリアデザイン学部紀要』(法政大学キャリアデザイン学部)、2015年、第12号、pp.133-151。
- 貝塚泰幸「死を前にした人、Gawain」、『千葉商大紀要』(千葉商科大学)、第52(2)号、2015年、pp.133-146。
- 桑原俊明「ケルト文化への招待：神話から現代へ(5)アーサー王伝説(中編)」、『盛岡大学英語英米文学会会報』(盛岡大学英語英米文学会)、第26号、2015年、pp.9-22。
- 小林宜子「記憶の浄化と英文学史の創出：宗教改革期の好古家ジョン・リーランドをめぐる考察(特集 中世とルネサンス：継続/断絶)」、『西洋中世研究』(西洋中世学会)、第6号、2014年、pp.51-70。
- Makiko KOMIYA “Here Sir Gawayne Slew Sir Vwayne His Cousyn Germaine”: Field’s Alteration on Malory’s *Morte Darthur*,” *Poetica*, 83, 2015, pp.107-119.
- 高宮利行「書物文化、そのさらなる発展のための書誌学：高宮利行氏インタビュー」、『図書新聞』、第3181号、2014年11月1日、p.1。
- 多ヶ谷有子「カンタベリー詣でとお伊勢参り：『カンタベリー物語』と『東海道中膝栗毛』」、『チョーサーと中世を眺めて：チョーサー研究会20周年記念論文集』(狩野晃一編)、麻生出版、2014年、pp.169-184。
- 玉川明日美、「切り裂かれる身体：The Pardoner’s Tale における〈誓言〉と〈聖遺物〉の連関性」、『チョーサーと中世を眺めて：チョーサー研究会20周年記念論文集』(狩野晃一編)、麻生出版、2014年、pp.125-137。
- 遠山菊夫「コミュニケーション以前：古英語・中英語話者による相互行為(1)『ベーオウルフ』および『ガウェイン卿と緑の騎士』における会話の原則」、『杏林大学外国語学部紀要』(杏林大学外国語学部)、第27号、2015年、pp.45-86。
- 平井靖子「*Sir Gawain and the Green Knight* における“pentangle”の表象(研究発表要旨)」、『チョーサー研究会会報』(チョーサー研究会事務局)、第2号、2014年、pp.30-32。
- 松井倫子「『カンタベリー物語』、『総序』の騎士の‘Ful ofte tyme he hadde the bord bigonne’とその周辺」、『チョーサーと中世を眺めて：チョーサー研究会20周年記念論文集』(狩野晃一編)、麻生出版、2014年、pp.26-42。
- 山本まり華「『アーサー王の死』において超自然的現象が果たす役割」、『EVERGREEN』(昭和女子大学大学院英米文学研究会)、第35号、2015年、pp.57-74。
- 渡邊浩司「『アーサーとマーリン：14世紀・中英語の物語』(オーヒンレック写本に基づくアンヌ・ベルトウロによる現代フランス語訳、グルノーブル大学出版局)」、『中央評論』(中央大学中央評論編集部)、第288号、2014年、pp.214-217。
- <その他>
- 河原温・堀越宏一『図説・中世ヨーロッパの暮らし』、河出書房新社、2015年。
- 森瀬繚『いちばん詳しい「ケルト神話」がわかる事典：ダーナの神々、妖精からアーサー王伝説まで』、SBクリエイティブ、2014年。
- 吉久保肇子(竹中肇子)「アンティーク趣味」『イギリス文化辞典』、丸善出版、2014年、pp.98-99。
- ※イギリスの家具の歴史とアンティーク趣味を綴った。(執筆者自身による要旨からの抜粋)
- その他、本書の「第3章 物語・小説」に「アーサー王物語」、「第4章 詩」に「チョーサーと『カンタベリー物語』」についての記述あり
- <講演>
- 高宮利行「昔の本はこうだった：アッと驚く古書の世界」、慶應あるびよん・くらぶ土曜教養講座、第82回講演会(2014年5月31日)、於慶應義塾大学三田校舎南校舎443番教室。
- 高宮利行「アーサー王伝説の受容：トマス・マロ

リー著『アーサー王の死』(1485)の出版史を巡って」、小泉信三記念講演(2014年10月21日)、於慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール。

Toshiyuki TAKAMIYA 'A Short History of Medieval English in Keio University,' IES-Keio Joint International Conference: Old and Middle English Studies: Texts and Sources (Sep 3, 2014), held in ISLS, University of London.

## 独文学 (書誌担当: 渡邊徳明)

<研究(単行本)>

嶋崎啓(共著)『男と女の文化史』、東北大学大学院文学研究科出版企画委員会編(人文社会科学講演シリーズ 6)、東北大学出版会、2013年。

田中一嘉(単著)『中世ドイツ文学における恋愛指南書: 文学ジャンルとしての「ミンネの教訓詩」の成立・発展』、風間書房、2014年。

田中一嘉(共著・編者)『ことばと文化の饗宴: 西洋古典の源流と芸術・思想・社会の視座』(田中一嘉・中村美智太郎編著)、風間書房、2014年。

山本潤(単著)『「記憶」の変容: 『ニーベルングンの歌』および『哀歌』に見る口承文芸と書記文芸の交差』、多賀出版、2015年。

山本潤(共著)『カタストロフィと人文学』(西山雄二編著)、勁草書房、2014年。

Yoshihiro Yokoyama (横山由広), *Studien zum Reimgebrauch und Stil Hartmanns von Aue im Etablierungsprozess der Literatursprache um 1200 am Beispiel der präritalen Formen von kometen*, Diss. Trier 2014. (<http://ubt.opus.hbz-nrw.de/volltexte/2014/901/>).

<研究(雑誌・紀要論文等)>

青木三陽「『パルツィヴァール』における異教徒像ならびに東洋像について(1)」、『西洋文学研究』(大谷大学西洋文学研究会)、第31号、2011年、pp.1-24。

青木三陽「『パルツィヴァール』における異教徒像ならびに東洋像について(2)」、『西洋文学研究』(大谷大学西洋文学研究会)、第32号、2012年、pp.1-16。

石川栄作「『ニーベルングンの歌』と『平家物語』

の比較研究(VI): クリームヒルトと二位殿と建礼門院」、『言語文化研究』(徳島大学)、第22号、2014年、pp.45-72。

伊藤亮平「『高貴なモーリンガー』におけるミネザングの受容について—ヴァルター L72, 31を中心に—」、『表現技術研究』(広島大学表現技術プロジェクト研究センター)、第9号、2014年、pp.30-42。

寺田龍男「中世ドイツ文学の研究と教育—『ニーベルングンの歌』をめぐる近年の学術出版状況から—」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』(北海道大学大学院教育学研究院)、第121号、2014年、pp.1-15。

松原文「『ニーベルングンの歌』における triuwe: クリエムヒルトの宝の要求に関する写本 B・Cの相違を手がかりに」、『詩・言語』(東京大学大学院ドイツ語ドイツ文学研究会)、第75号、2011年、pp.1-23。

Akihiro Hamano (浜野明大), "Der Gralsheld Galaad als Erlöser? – Die unüberwindliche menschliche Beschränktheit des religiös-idealen Heldenbildes im Prosa-Lancelot", *Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte*, 108/ 3, 2014, pp.259-277.

Noriaki Watanabe (渡邊徳明), "Eine Parodie nibelungischer Gewalttaten. Der "Rosengarten zu Worms" A und D", *Ästhetik der Dinge. Diskurse der Gewalt*, München, 2013, pp.182-195.

渡邊徳明「『ニーベルングンの歌』における愛の内面性をめぐって—クリエムヒルトに対するハゲネの誤解—」、『リユンコイス』(桜門ドイツ文学会)、第48号、2015年、pp.25-41。

<翻訳>

『中世オランダ語「狐の叙事詩」—「ライナールト物語」「狐ライナールト物語」』(檜枝陽一郎訳)、言叢社、2012年。

## 仏文学 (書誌担当: 高名康文)

<研究(単行本)>

前川久美子『中世パリの装飾写本』、工作舎、2015年6月。

<研究(雑誌・紀要論文等)>

伊藤了子「副詞 *ensi, ausi, si* と COM の共起—13 世紀『散文トリスタン物語』のばあい—」、『人文論究』(関西学院大学人文学会)、第 63 号(3)、2013 年 12 月、pp.55-77.

川那部和恵「フランス 15~16 世紀の「愚者演劇」における笑いの衣装—その批評性をめぐって—」、『東洋法学』(東洋大学法学会)、第 58 巻 2 号、2014 年 2 月、pp.188(61)-176(72).

久保田勝一「14 世紀前半北仏における詩歌の擁護について—托鉢修道会と対決する宮廷詩人ジャン・ド・コンデ—」、『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会)、第 45 号、2013 年 3 月、pp.35-59.

瀬戸直彦「古仏語版『秘中の秘』とウスタシュ・デシャンの養生術」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(早稲田大学大学院文学研究科)、第 60 号第 2 分冊、2015 年 2 月、pp.33-46.

高名康文「『狐物語』B 写本第 5921-22 行を巡る新旧校訂の比較」、『ヨーロッパ文化研究』(成城大学大学院文学研究科)、第 34 集、2015 年 3 月、pp.127-149.

田辺めぐみ「子宝祈願の遺産—ブルターニュ公継承問題をめぐって—」、『ステラ』(九州大学フランス語フランス文学研究会)、第 33 号、2014 年 12 月、pp.159-174.

※『ピエール二世の時祷書』(フランス国立図書館ラテン語 1159 番)に多数収載されている写本の注文主・所有主の痕跡を 15 世紀半ばのブルターニュ公継承問題から検討し、子宝祈願の表象における性差の実態を明らかにした。(執筆者自身による要旨)

辻部(藤川)亮子「「至純の愛」再考」、『西洋中世研究』(西洋中世学会)、第 6 号、2014 年 12 月、pp.175-193.

※オイル語宮廷風恋愛歌のテキストについて、古典修辞学の観点を導入したひとつの読解モデルを提案する。(執筆者による論文要旨より)

渡邊浩司「流布本『メルラン続編』の写本伝承をめぐる考察—騎士ファリアンの戦死と生存—」、チョーサー研究会『チョーサーと中世を眺めて—チョーサー研究会 20 周年記念論文集』(狩野晃一編)所収、2014 年 10 月、pp.367-383.

#### <辞書・事典>

Takeshi Matsumura (松村剛), *Dictionnaire du français médiéval*, Belle Lettres, 2015 (刊行予定).

松村一男・平藤喜久子・山田仁史編『神の文化史事典』白水社、2013 年 2 月.

※ケルト関連の項目が 97 あり、アーサー王物語に関するものもかなりある。

#### <原典の校訂版、および原典の翻訳>

« Amis et Amiles : texte et commentaires », (éd. Hiroshi OGUSIRU (小栗栖等))『和歌山大学教育学部紀要』、第 65 号、2015 年 2 月、pp. 5-24.

『パリとヴィエンヌ』のアルハミーヤ文(大高順雄校注)、『大手前大学論集』、第 15 号、2015 年 3 月、pp.207-237.

『フランス民話集 IV』(金光仁三郎、山辺雅彦、渡邊浩司、本田貴久、林健太郎訳)、中央大学出版部(中央大学人文科学研究所翻訳叢書 14)、2015 年 3 月.

ロベール・ド・ボロン『西洋中世奇譚集成 魔術師マーリン』(横山安由美訳)、講談社(講談社学術文庫)、2015 年 7 月.

#### <研究書の翻訳>

フィリップ・ヴァルテール「さまよう靈魂、カボチャと幽霊—ハロウィンのイマジネール」(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)、『中央評論』(中央大学中央評論編集部)、第 289 号、2014 年 11 月、pp.126-131.

ベルンハルト・ビショッフ『西洋写本学』(佐藤彰一・瀬戸直彦訳)、岩波書店、2015 年 9 月.

#### <書評>

池上忠弘「フランス中世文学を巡る権威」、『流域』(青山社)、第 74 号、2014 年 6 月、pp.41-45.

※松原秀一・天沢退二郎・原野昇編訳『フランス中世文学名作選』(2013 年、白水社)の書評エッセイ。解説をくわしく記した。(執筆者自身による要旨)

黒岩卓「N・ラベール、B・セール『100 語でわかる西欧中世』(高名康文訳)、白水社、2014 年」、『Cahier』(日本フランス語フランス文学会)、第 16 号、2015 年 9 月、pp.21-22.

辻部(藤川)亮子「Pierre Bec (ed.), *L'Amour au Féminin : les Femmes-Troubadours et leurs Chansons*」、

『西洋中世研究』(西洋中世学会)、第6号、  
2014年12月、p.215.

—「Claudio Galderisi (dir.), *Translations médiévales : cinq siècles de traductions en français au Moyen Âge (XI-XV<sup>e</sup> siècles) : étude et répertoire*」、『西洋中世研究』(西洋中世学会)、第6号、2014年12月、  
p.229.

Takeshi Matsumura (松村剛), « Compte rendu : Robert le Clerc d'Arras, *Les Vers de la Mort, Li loenge Notre Dame* », *Revue de Linguistique romane*, 78, décembre 2014, pp.577-582.

渡邊浩司「Philippe Walter, *Gauvain le chevalier solaire* (Paris : Imago, 2013)」、『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会)、第47号、2015年2月、pp.223-254.

#### 中世ラテン文学・伊文学・西文学・その他 (書誌担当：高名康文)

<研究(単行本)>

杏掛良彦『人間(ひと)とは何ぞ—酔翁東西古典詩話』、ミネルヴァ書房(叢書・知を究める6)、2015年6月.

<博士論文>

Yoshinori Ogawa (小川佳章), *Ideas religiosas de Juan Manuel*, tesis doctoral presentado en la Universidad Autónoma Metropolitana, 2014.

<研究(雑誌・紀要論文等)>

Yoshinori Ogawa (小川佳章), “*Mala muerte en el Libro de buen amor*”, Francisco Toro Ceballos (ed.), *Juan Ruiz, Arcipreste de Hita y el “Libro de Buen Amor” : Congreso Homenaje a Alberto Blecuá al cuidado de Francisco Toro Ceballos*, Alcalá la Real, Ayuntamiento, 2015, pp.175-180.

徳橋曜「15世紀イタリアの文化動向と書籍販売」、『西洋中世研究』(西洋中世学会)、第6号、2014年12月、pp.27-50.

<原典の校訂版、および原典の翻訳>

『ギリシア詞華集1』(杏掛良彦訳)、京都大学学術出版会(西洋古典叢書2015)、2015年7月.  
「アマディス・デ・ガウラ」(福井千春訳)、『中央評論』(中央大学中央評論編集部)、第286-292号、2014-2015年.

※福井千春氏(2014年4月逝去)の遺稿を、ご遺族と渡邊浩司氏の協力により掲載したものの。

第286号(2014年1月)、pp.92-97;第287号(2014年5月)、pp.162-168;第288号(2014年7月)、pp.133-141;第289号(2014年11月)、pp.163-168;第290号(2015年1月)、pp.117-126;第291号(2015年5月)、pp.144-151;第292号(2015年7月)、pp.149-157.

「オルフ カトゥリ・カルミナ カルミナ・ブラーナ 歌詞対訳」(細川哲士訳)、NHK交響楽団第1774回定期公演、2014年1月25日(土)、26日(日)で配布された冊子.

<研究書の翻訳>

チャールズ・S・シングルトン『『キタ・ノワ』試論 第5章』(浦一章訳)、『イタリア語イタリア文学』(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部南欧語南欧文学研究室)、第7号、2014年5月、pp.91-109.

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局  
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1  
慶應義塾大学 文学部 徳永聡子 研究室内  
E-mail : iasjp2015@gmail.com  
メンバーリスト : members@ml.arthuriana.jp  
(新規登録・アドレス変更は事務局まで)  
学会ウェブサイト :  
<http://www.arthuriana.jp/index.php>